承久度鷹尾神社本殿 THE HONDEN OF TAKAO SHRINE BUILT IN 1219

山口佳巳*
Yoshimi YAMAGUCHI

The *honden* of Takao Shrine was reconstructed in 1213 and the *sengu* took place in 1219. Some documents including the plan and the order for woods have been remained about this reconstruction. The purpose of this study is to clarify the style and the origin of the *honden* in 1219 from these documents.

This analysis revealed that the *honden* had some humble features. We consider that it became impossible to maintain the former style by reason of economy. Furthermore the *honden* had something in common with Kora Shrine's *honden*. Therefore we conclude that Takao Shrine was derived from Kora Shrine.

Keywords: Nagare-style, Kora Shrine, Betsugu, Order for woods, Plan

流造, 高良大社, 別宮, 用材注文, 指図

1. 緒言

鷹尾神社は、福岡県柳川市大和町鷹ノ尾に鎮座し、応神天皇・仲哀天皇・神功皇后を祀る。筑後一宮高良大社の別宮であるとともに、瀬高下荘の鎮守でもあった。

当社は、建暦三年(1213)に社殿が焼失し、承久元年(1219)に遷宮が行われた。その承久度再建に際して提出された本殿の用材注文と遷宮時の指図が伝えられており、それらにより承久度本殿の構造形式を具体的に復元することが可能である。これまでに佐藤正彦氏¹⁾と永井規男氏²⁾による二つの復元案があるが、いずれも史料を十分に活かした論考とは言い難く賛同できるものではない。そこで本稿では、史料を再検証した上で改めて復元考察し、承久度本殿の建築史上における特質について新たな見解を示したい。

承久度本殿は三間社流造であったが、同形式の現存遺構は建保七年(1219)の神谷神社本殿が最古例であり、それを遡るものはない。また、谷重雄氏の論考³⁾において、嘉元造替の上賀茂神社本殿は破風板を身舎と庇で別材としていたことが明らかにされており、鎌倉時代は流造本殿の細部形式の変遷過程にあった時期でもある。したがって、承久度本殿は類例の乏しい鎌倉時代前期における流造本殿の一形式を示す貴重な例であるとともに、流造本殿の発展過程について新たな知見を提供する重要な例と言える。

なお、鷹尾神社の文献資料に関しては、先行研究において熊本中世史研究会編になる活字本『筑後鷹尾文書』⁴⁾に所収された文書が用いられてきたが、一部に誤読が認められる。本稿では、重要となる文書については、その後刊行された柳川古文書館編になる写真本

『筑後鷹尾文書』⁵⁾において確認し、明らかな誤読は訂正して引用することにした。

2. 当社の概要

(1) 沿革

鷹尾神社は、社伝によると貞観十一年(869)の勅建という^{注1)}。当社に関する資料上の初見は、保元四年(1159)の「高良別宮供下支配注文」^{注2)}であり、「高良別宮」として現れる。この頃の本殿については断片的な記録に頼るほかないが、承元元年(1207)の「祭礼日記」^{注3)}に「□於御宝殿上之差萱修理者、雖元宮移可差也」とあり、「御宝殿」(本殿)の屋根を「差萱」すなわち茅葺の屋根の腐朽部に茅を補充して修理する旨が記されている。また、建暦二年(1212)の「鷹尾社祭礼神官装束等覚并御財物日記」^{注4)}には、「注進、建暦二年〔壬申〕瀬高下御庄別宮御前修理次第日記事、合檜皮百五十井、葺手ハ高佐後舟請」(〔 〕内は割註を示す。以下同じ。)とあり、「檜皮百五十井」が注進されていることから、当時の本殿は檜皮葺であったと考えられる。同年十一月には遷宮が行われた^{注5)}という。

その翌年、建暦三年の「鷹尾社焼失日記(断簡)」^{注6)}に、

建暦三年〔癸酉〕四月廿五日〔丙申〕夜、大宮司紀真大夫元真被夜打〔仁〕打、依類火宮并□焼失了、紀真太夫内方被打害焼失火也、但竹尾御目代□汰候時、御祭同年四月十七日戊子、同廿五日如此有質□

とあり、大宮司紀真大夫元真が夜討ちされた際、類火により宮が焼失したことが分かる^{注7)}。その後、建保四年(1216)に本殿再建のため

* 日本学術振興会 特別研究員・博士(文学)

Research Fellow of the Japan Society for the Promotion of Science, Dr. Let.

に用材の注文が提出され^{注8)}、承久元年に遷宮が行われた^{注9)}という。

仁治三年(1242)の「高良別宮神官等申状」^{注10)}には、「昔宝殿及大破、礎石徒変苔下、悲哉、今仮屋忽令朽損葺不全」とあり、宝殿は昔に大破し、その礎石が苔の下に埋もれてしまっており、今では仮屋であるという。この時、「御宝殿已下宮社神官寺并御神輿等」を先例に任せて造営されるように申し進めている。後の記録によれば、造営料の不足や未納があったが秘計を廻らして造営の功を修めたという^{注11)}。

そして、弘長三年(1263)の「鷹尾社神官等言上状案(前欠)」^{注12)}に「其後又依経年序、柱□□□全令朽損葺板、御正体為雨露」とあり、葺板が朽損していることが分かる。それを受けて、本殿の上葺用途が注文されている^{注13)}。その中に「横樑三千五百枝〔長七尺、広四寸五分、厚一寸〕」とあり、屋根は檼樑を用いた板葺であったものと考えられる。修理後、文永二年(1265)に遷宮が行われている^{注14)}。さらに、弘安八年(1285)に修理用途が注文され^{注15)}、正応五年(1292)に遷宮が行われている^{注16)}。このように、承久度に再建されてから約二十年間隔で、屋根の葺替が行われていることが分かる。

年紀未詳の「鷹尾社造営願案(後欠)」^{注17)}によれば、文龜二年(1502)九月に「神殿及破壊候二付而、古例之通造営之」とあり、神殿すなわち本殿が破壊したので古例の通りに造営したという。また、その百年余り後の「立斎様御代」すなわち当地の領主立花宗茂の代に再び本殿が破壊した際には、本殿のみならず楼門ほかも建立したことが知られる^{注18)}。それから年々破損し葺板が朽ち雨漏るので、「先年奉願候処二、茅を以上葺被仰付」すなわち先年の願が認められ、屋根は茅で葺くように仰せ下されたという^{注19)}。江戸時代を通じて立花氏の庇護を受け、現在の本殿は柳川藩記録により天保四年(1833)の再建とされている^{注20)}。

(2) 現在の本殿

現在の本殿は、桁行三間・梁間三間に一間の向拝を付す。屋根は、入母屋造で銅板葺とし千木・堅魚木を載せる。周囲には切目縁を廻らせ、刎高欄を設ける。また、廻縁の途中には板壁のない脇障子を立てる。

桁行三間・梁間二間を内陣とし、その前面一間通りを外陣とする。内陣後方には柱を立てて間仕切り、内々陣とする。内陣正面すなわち内外陣境は御簾を垂れるのみとし、内陣の側面・背面は板壁とする。外陣正面は内開きに蓆を吊り、両側面は片引戸を建てる。また、内々陣正面は三柱間ともに板扉を開く。

基壇上に土台を廻らせ、内陣回りは円柱、外陣正面は角柱を立てる。縁長押・内法長押・頭貫(先端は木鼻)で柱を固める。内外陣境において、内陣側の床を長押一本分高める。そのため廻縁にも段が付く。組物は拳鼻付の平三斗とし実肘木で桁を受け、中備は本臺股とする。二軒繁垂木である。内外陣ともに内部は出組の一種である亜麻組とし、中備には本臺股を配す。また、畳敷で竿縁天井を張る。

3. 先行研究と問題点

承久度本殿を復元的に研究した論考として、佐藤氏の「鷹尾神社本殿について―承久元年再建時の指図より―」と永井氏の「鷹尾神社承久再建本殿の建築構成について」が挙げられる。両者が復元史料として用いたのは、活字本『筑後鷹尾文書』に所収された建保四年の「御宝殿造営用材注文」^{注21)}(以下、「用材注文」とする)と承

久元年の「鷹尾社遷宮宝殿指図并用途直法等注文」^{注22)}(以下、「宝殿指図」とする)の二通である。

(1) 佐藤案

佐藤氏は、その論考において復元図は提示していないが、復元考察を行っている。まず規模形式については、「宝殿指図」にある「三間一面広庇」という記述と指図により、桁行三間・梁間二間の身舎前面に一間の庇を付けた流造で、庇回りにのみ縁を廻らすものとする。また、同文書の記述により、正面三間は格子(蓆)、庇の向かって左側面は「妻戸」(引違戸もしくは片引戸と推測)とし、その他の柱間はすべて蠣灰塗(漆喰塗)とする。そして、「用材注文」の「尅橋木四支〔長九尺、同下桁〕」という記述により、正面中央間の縁の前に長さ九尺の階段が設けられていたらしいとする。さらに、屋根については、「宝殿指図」の平面指図内の「裏板三間皆打達上栢板以鎧葺ス」及び本文記事中の「瓦五千余枚」という記述から、瓦葺であったことは確かであると述べている。

この復元案における最大の争点は、屋根を瓦葺とする^{注23)}ことであろう。鎌倉時代前期の神社本殿が瓦葺であったとするのは、いくら地方であったとしても早計と言わざるをえない。この点に関しては永井氏も異論を唱えているが、後述するように本稿の見解とは異なるものである。重大な問題であるので、改めて検証しておく。

まず、佐藤氏が瓦葺の根拠として挙げた「宝殿指図」の記述を見ていきたい。「裏板三間皆打達上栢板以鎧葺ス」は、裏板三間は皆打ち達げ、上の栢板で以て鎧葺すと読める。佐藤氏は、この「鎧葺」を瓦葺の証拠の一つとしているようであるが、鎧のように段を付けて栢板を葺くもの、すなわち板葺あるいは桁葺であったことは想像されるものの、特に瓦葺である必要はない。また、「瓦五千余枚」の「瓦」という字を写真本『筑後鷹尾文書』にて確認したところ、「凡」(「瓦」とは似るが上の一画がなく、凡の異体字である)と記されており、翻刻時の誤読であることが分かった。これを含む一文を改めて引用すると、

母屋二間平殿上栢板長三尺、面四五六寸、若檐板七八寸、凡五千余枚、直米八石余下取、鎧葺〔スル〕也

となり、「栢板」、「檐板」という板材に続いて唐突に「瓦五千余枚」とするよりも、それらの板材が「凡(およそ)五千余枚」とする方が、文脈上においても適当であろう。なお、付け加えるならば、瓦五千余枚に対して直米八石余では瓦一枚の値段が僅か米一合六勺程度となり、あまりにも安すぎる。したがって、佐藤氏が示した根拠はいずれも瓦葺を証明するものとは言えず、その復元案についても信を置きがたい。

(2) 永井案

一方、永井氏は、佐藤氏の復元案をやや批判的に捉え、同一の史料を用いてより具体的に復元考察を行い、復元図(平面図・正面立面図・側面立面図)を提示している。永井氏の復元案は、桁行三間(柱間6尺2寸)・梁間二間(柱間5尺5寸)の身舎の前面に一間(柱間5尺5寸)通りの庇を付けた平面とする。すなわち、三間一面の流造、平入である。庇を取り囲むように樑縁を廻らせる。脇障子は立てず、いずれの隅も刎高欄とする。正面中央には、四級の木階を設ける。身舎と庇で段差を付けた亀腹上に礎石を据え柱を立てる。身舎は円柱、庇は角柱とし、総柱平面とする。身舎柱は腰長押・内法長押、庇柱は縁長押・内法長押で固め、身舎・庇境においては、各長押を

背違いにして身舎を一段高くする。組物は舟肘木とし、妻梁も舟肘木で受ける。また、妻梁上には扱首(合掌)を組み、斗で棟木を受ける。本文記述によれば、垂木は身舎・庇ともに大疎垂木とする。破風板は身舎・庇境よりも少し庇側寄りで継ぐ。屋根は栢板を「鎧葺」とする。柱間装置については、正面三間は格子(蔀)が嵌り、庇の向かって左側面は妻戸(開戸)とする。それ以外はすべて板壁であって、蟻灰塗としていたとする。

この復元案における大きな問題として三点が挙げられる。まず、扱首についてであるが、永井氏は「用材注文」に「指十二」とあるのは「指寸二」であるとし、「指寸」はサスと読み、二組の扱首と解釈し、妻壁にのみ配している。しかし、建物内部において扱首竿のみの扱首とするのは類例が少ないが、妻壁においては一般的に扱首束を加えて豕扱首とすべきであって、扱首竿のみの類例はない。さらに、梁間断面図が提示されていないため判然としないが、扱首が妻壁にしかないとなると、棟木は妻壁と扱首のみで支えられることとなり、内部では棟木を支える部材がなく、ただ梁を架けるのみになってしまう。そもそも、「寸」と「十」は書き誤る可能性は少ないもので、恣意的な解釈とも言える。また、「指」だけでサスと読める。

続いて舟肘木についてであるが、永井氏は柱頂には肘木だけが置かれた舟肘木組であったとしている。但し、「用材注文」には「臂木十六」と十六支の肘木が注文されており、それらの肘木をすべて舟肘木として柱頂に使うならば、妻梁下のみならず身舎内部に立つ柱の頂部にも舟肘木を配して梁を受けることになり、不適当な納まりである。また、身舎側柱と庇柱のみに舟肘木を配すとすれば、注文された肘木が二支余ることになり、注文との相違が生じる。いずれにしても、肘木の使い方に問題があると言わざるをえない。

最後に破風板についてである。破風板を身舎と庇で分けて注文することは間々見られることであるが、嘉元造替の上賀茂神社本殿と同様に継ぎ、流造の古い形式とするのは後述するように安直である。以上のように、永井氏の復元考察も不十分である。

4. 復元史料

本稿における主な復元史料は、先行研究と同様に建保四年「用材注文」と承久元年「宝殿指図」の二通である。以下に、その二通を掲げておく。なお、活字本の誤植等は写真本により訂正しておいた。

「用材注文」

□尾宮御宝殿造営料別宮御宝殿寸法事

□(三か)間一面〔間六尺二寸〕

柱十六本〔長九尺六寸三分、九寸〕

桁三枝〔長二丈六尺六寸、四五寸〕

棟一支、長桁同〔四五寸〕

長押廿四支内〔長二丈^{注24)}十二支、一丈二尺六支、七尺六支〕

垂木卅六支内〔長一丈二尺十二支、広^{注25)}ヒサシ、八尺十二支、一丈三尺十二支、母屋後^{注26)}〕

梁四枝〔長一丈三尺、五六寸〕

指十二

博風六枚、開板二枚〔長同桁〕

斗二、臂木十六

大床下梁四支〔五六寸、長一丈三尺〕

縁柱十本〔長三尺、口六寸〕

尅橋木四支〔長九尺、同下桁〕

木舞廿四支

百六十枚〔但後継定〕

六十四枚〔長六尺五寸〕

卅^{注27)}支

枚〔長一丈二尺、広一尺〕

本〔長五尺〕

縁角木二支〔長七尺、五六寸〕

右、注文大略如件、

建保四年〔丙子〕九月

この文書は、冒頭に「□尾宮御宝殿造営料別宮御宝殿寸法事」とあり、建築部材名称・員数・寸法を明記した用材注文であることが分かる。詳しくは後述するが、「宝殿指図」に示された本殿の規模と、この「用材注文」により復元される規模が一致するため、同一の建物を示しているとしてよい。但し、後半に欠落箇所があり、すべての用材を知ることはできない。

「宝殿指図」

(前欠)

御宝殿三間一面広庇

(平面指図)

如此名ゝ一間宛塗蟻灰名別二斗宛入

右、御宝殿間宛如此、柱長八尺五寸、口七寸五分、梁一丈一尺、間五尺五寸、正面広庇五尺五寸、高七尺五寸、飛檐三尺五寸、檐雨打四尺二寸、妻差出雨打四尺五寸、裏板、母屋庇皆打遂也、母屋二間平殿上栢板長三尺、面四五六寸、若檐板七八寸、凡^{注28)}五千余枚、直米八石余下取、鎧葺〔スル〕也、正面三間路子、宝殿如此、大工作料二十石、葺手作料十石、棟上布一端、紙十帖、葺一両、柱口每杢形餅四本、饗前又二本、一前宝殿材木、皆以領家御沙汰也、但板敷足固釘、随入又葺釘、名別千宛弁、大工饗前、長日同名役也、

(中略)

此御奉行之時造畢、

承久元年〔歳次己卯〕十二月五日〔日次丁卯〕亥時御遷宮畢、(以下略)

この文書には平面を示した指図(図1)が掲載されている。鎌倉時代において、神社本殿の指図は珍しい。指図の後には、柱間寸法や一部の材木寸法が見られる。

先に挙げた「用材注文」と、この「宝殿指図」に挙げられた材木寸法は同一ではない。柱の長さは、前者が「長九尺六寸三分」、後者が「長八尺五寸」である。同様に、梁の長さは「長一丈三尺」と「長一丈一尺」と、いずれも「用材注文」の方がやや長い。したがって、前者は切削等の部材の加工を必要とする用材の注文であるのに対し、後者は仕上りの寸法を記載した寸法書であると言える。

5. 復元考察

以上の復元史料を中心として、復元を進めていきたい。なお、「用材注文」の後半部分が欠落しているため、その部分に関しては推定に留めておく。

図1 宝殿指図(写真本『筑後鷹尾文書』より作成)

(1) 構造形式の復元

【平面】

平面形式は、「宝殿指図」の平面指図と「御宝殿三間一面広底」という記述により、桁行三間・梁間二間を身舎とし、その前面に一間通りの底を付し、底回りにのみ廻縁を設けた平面とすることが確定される。したがって、指図の向かって右が本殿の正面に相当する。また、「用材注文」において十六本の柱が計上されていることから、身舎内部の柱を省略することなく総柱としていたことが分かる。

次に各柱間寸法についてである。まず、「用材注文」に「□間一面、六尺二寸間」とあることから、桁行は一間を6尺2寸とすることが明らかである。一方、梁間については、「宝殿指図」に「御宝殿間宛如此、柱長八尺五寸、口七寸五分、梁一丈一尺、間五尺五寸、正面広底五尺五寸」(傍点筆者、以下同じ)とあり、梁の長さは1丈1尺(これは二間分を示している)で、その間すなわち梁間一間分の柱間は5尺5寸、正面底の柱間(底の出)も5尺5寸とすることが知れる。

以上により、桁行柱間は6尺2寸、梁間は身舎・底ともに5尺5寸であったことが分かる。

【軸部】

柱

柱については、「用材注文」に「柱十六本〔長九尺六寸三分、□九寸□〕」、「宝殿指図」に「柱長八尺五寸、口七寸五分」とある。先にも触れたように、柱十六本というのは平面指図に描かれた柱の数と一致し、身舎内部の柱を省略することなく総柱としていたことが分かる。先述のように、「用材注文」は削り代や仕口寸法等を見込んだもので、「宝殿指図」は建物の各部寸法すなわち部材の仕上がり寸法を示したものであることから、柱は長さ8尺5寸で直径7寸5分の円柱であることが分かる。したがって、削り代及び仕口寸法等として1尺1寸3分が見込まれていたことになる。なお、その長さから掘立柱とするには短すぎるので、礎石建であったことが想定される。また、「正面広底五尺五寸、高七尺五寸」とあることにより、底の高さ^{注29)}(礎石天端から軒桁上端まで)は7尺5寸とされる。なお、「宝殿指図」に「三間一面広底」、「正面広底」とあるように、前面の一面底は「広底」^{注30)}と記されていることから、底柱が角柱であった可能性も否定できない。

梁

梁については、「用材注文」に「梁四枝〔長一丈三尺、五六寸〕」、「宝殿指図」に「梁一丈一尺」とある。桁行三間であるので身舎梁は四支必要であり、計上された員数に合致する。身舎梁間は1丈1尺(5尺5寸間の二間)であり、注文に見える長さ1丈3尺は柱や桁との仕口を考慮して少し長めにとられていることが分かる。

断面に関しては、「用材注文」に「五六寸」(5寸×6寸の意)とある。用材の仕上げ削りについては、ほぼ同時代の興福寺北円堂を参照して^{注31)}、手斧と槍鉋による削り代を表面と裏面を合わせて5分(15mm)程度と推定される。したがって、用材に5分の仕上げ削りを施し、幅4寸5分・成5寸5分とされる。捨眉や鯖尻を施すには材が細いので、単なる直材の陸梁であったと考えられる。なお、底の繫梁についての記述は見られない。

桁・棟木

桁及び棟木については、「用材注文」に「桁三枝〔長二丈六尺六寸、四五寸〕」、「棟一支、長桁同〔四五寸〕」とある。桁三支は、身舎前後の桁と底の桁に一支ずつ、棟一支は棟木として使うものとしてよい。なお、蟻羽の出については後述したい。桁及び棟木の断面はともに「四五寸」とあり、5分の仕上げ削りを施して幅3寸5分・成4寸5分とされる。

長押

長押については、「用材注文」に「長押廿四支内〔長二丈十二支、一丈二尺六支、七尺六支〕」と長さの異なる三種の用材が計上されている。「長二丈」は桁行方向に柱間三間分を通す長押、「一丈二尺」は梁間方向の身舎二間分を通す長押、「七尺」は梁間方向の底に用いる長押としてよいであろう。

まず、身舎を廻る長押としては腰長押(外側のみ)と内法長押(内外とも)、底を廻る長押としては縁長押(外側のみ)と内法長押(内外とも)が挙げられる。すなわち、身舎回りに「長二丈」が六支、「一丈二尺」が六支、底回り^{注32)}に「長二丈」が三支、「七尺」が六支必要となる。残る「長二丈」三支は、身舎の棟通りの柱筋で内々陣と内陣を分ける区画として、腰長押(外側のみ)と内法長押(内外とも)に使うのが妥当であろう。ここであえて腰長押としたのは、「宝殿指図」の指図内において棟通りの柱筋に添えて「板敷下三間一在^{注33)}皆塗」と記されていることから、板敷の下に壁を塗るべき箇所があることが分かり、内々陣は内陣より床高を高めていたと判断されるためである。なお、見方を変えれば、床高の大きな内々陣の床端部にある見切りの材に当たるので、框とも言える部材である^{注34)}。

【小屋・軒】

家扱首

「用材注文」に「指十二」とあるのは、サスすなわち家扱首を示すものと考えられる。員数が十二とあるのは、扱首束一支と扱首竿二支の計三支を一組とした四組分の家扱首の用材とすることができ、四支ある身舎梁上に一組ずつの家扱首を置くものとされる。

垂木

垂木については、「用材注文」に「垂木卅六支内〔長一丈二尺十二支、広ヒサシ、八尺十二支、一丈三尺十二支、母屋後〕」と長さの異なる三種の用材が計上されている。「長一丈二尺」は「広ヒサシ」すなわち底に、「一丈三尺」は「母屋後」すなわち身舎の後流

れに、残る「八尺」は身舎の前流れに用いる垂木としてよいであろう。身舎の垂木は、前流れが短く、後流れが長いので、前流れは身舎・庇境の桁で止まり、庇の垂木は身舎・庇境の桁から出て庇の桁を打ち越して掛かるものであることが分かる。

まず、庇の垂木は、身舎柱・庇柱の長さ(8尺5寸・6尺6寸)^{注35)}と柱間(5尺5寸)より算定すると、3寸5分勾配となる。身舎の垂木の勾配算定については棟高が必要であるが、いずれの文書においても明記されていない。そこで、現存遺構を参照したいところであるが、三間社以上で妻壁のみならず内部の身舎梁上にも豕叔首を配した同時代の類例はない。同様の架構とするものとしては、文永度の香取神宮アサメ^{注36)}殿⁶⁷⁾と嘉元造替の上賀茂神社本殿の復元案が挙げられ、いずれも妻壁と小屋内(香取神宮アサメ殿は化粧屋根裏)は、同じ規格の梁と豕叔首を用いたことが明らかである。前者は6寸5分勾配、後者は7寸5分勾配とする。本稿では両者の平均値を採り、身舎垂木は7寸勾配としたい^{注37)}。なお、6寸5分勾配とした場合は棟木の高さは2寸7分5厘低くなり、7寸5分勾配とした場合は2寸7分5厘高くなる程度であり、復元図において視覚的に大きな差異はない。

また、いずれの垂木も十二支が計上されていることから、身舎・庇ともに一間を三支割とする大疎垂木(一枝は約2尺7分)であったことが分かる。疎垂木であるので、柱真打として両螭羽には垂木を各一支ずつ配する計算となり、結局、螭羽の出は垂木二支分となる。なお、飛檐垂木が「用材注文」にないので、身舎も庇も一軒であったことが分かる。

木舞・垂木裏板

疎垂木上に打たれる木舞については、「用材注文」に「木舞廿四支」とある。寸法の記載はないが、木舞は桁と同長を渡すものであり、2丈6尺程の長さを細い一材で渡したとは考えがたく、途中で継いだ可能性が少なくない。復元図においては、現存遺構を参照し^{注38)}、木舞の間隔は2尺程、一列を二支で継いだものと想定した。

また、「宝殿指図」に「裏板、母屋庇皆打遂也」とあることから、身舎・庇ともに木舞上に垂木裏板を張っていたことが分かる。

なお、茅負の用材は「用材注文」にないが、弘安八年(1285)の「瀬高下庄鎮守大菩薩宝殿修理用途日記」^{注39)}に、「御宝殿修理用途」として「八九寸七反〔代二貫文、カウランノレウ、二支、カヤイノレウ〕」と挙げられていることから、承久度本殿にカヤイ^{注40)}すなわち茅負はあったとしてよいであろう。

軒の出・螭羽の出

「宝殿指図」に「飛檐三尺五寸、檐雨打四尺二寸、妻差出雨打四尺五寸」とある。「宝殿指図」の記述は、「飛檐」や「檐」とあることから軒に関するものであることが分かる。「用材注文」に計上された垂木で二軒とすることは不可能であるので、「飛檐」とあるのは現在でいう飛檐垂木の意味ではないとしてよい。『建築辞彙』には「飛檐榑」は「二軒ノ場合ニ、最も外方ナル榑ニシテ、茅負ヲ承クルモノナリ。(中略)又一軒ニテモ、反アラバ飛檐榑ナリ。(以下略)」の後者に当たるものと考えられる。すなわち、反りのある垂木を意味していると考えられ、「飛檐三尺五寸」は反りのある垂木が3尺5寸と解釈される。垂木の項で述べたように、垂木はそれよりもずっと長い材であるので、垂木の単純な長さではなく、垂木の出すなわち軒の出を示している可能性が少なくない。

また、それに続き、「檐雨打」、「妻差出雨打」というように「雨

打」という単語が見える。もちろんこれは対のものを示していると考えてよいであろう。「妻差出雨打」は、妻に差し出す雨打(軒)すなわち螭羽が想定される。軒の出が3尺5寸で、「檐雨打」が4尺2寸である。軒の出は側柱真から垂木先端までであり、「檐雨打」はそれよりも7寸長いので、板葺屋根(詳しくは後述)の先端までとするのが穏当であろう。したがって、対に記されていた「妻差出雨打」についても、側柱真から螭羽の板葺屋根の先端までを示していると考えられる。

以上により、軒の出は側柱真から3尺5寸、板葺屋根の先までが側柱真から4尺2寸と推定され、螭羽の屋根先までが側柱真から4尺5寸と考えられる。

【破風・屋根葺】

破風板

破風板については、「用材注文」に「博風六枚」とあることから、垂木と同様に身舎の前流れと後流れ、庇の流れとで別木としていたことが分かる。

破風板を身舎と庇で別木とするのは、嘉元造替の上賀茂神社本殿や仁治度厳島神社社殿^{注41)}で行われていることがすでに明らかであり、当時代の傾向と言える。

開板

「用材注文」に「開板二枚、長同桁」とある。この開板は、長さが桁と同じというから、桁行方向に用いる材木であると考えられる。開板という材は、仁治度厳島神社社殿の用材注文である暦仁二年(1239)の「伊都岐島社未造分屋材木等注進状」^{注42)}においても、今社拝殿・朝座侍屋・竈殿平門に「破風開板」あるいは「開板」として挙げられている。この三棟はいずれも板葺である^{注43)}ことから、板葺とする際に必要な材で桁行方向に用いるものであることが分かる。本復元案においては、ひとまず屋根頂部の覆い(障泥板)と想定しておく。

屋根葺

屋根葺に関しては、「宝殿指図」の「裏板三間皆打遂上栢板以鎧葺ス」と「母屋二間平殿上栢板長三尺、面四五六寸、若檐板七八寸、凡五千余枚、直米八石余下取、鎧葺〔スル〕也」という記述がある。

まず、先の記述により、垂木上にはすべて裏板を打ち、その上に栢板を葺くことが分かる。次に、その栢板は母屋二間(梁間)の平殿上において長さ3尺、幅4寸や5寸や6寸であり、また、檐板は幅7寸や8寸であり、それらは五千余枚あるという。ここから二種類の葺板があることが知られ、身舎には幅の狭いもの、残る庇には幅のやや広いものを用いるようである。これらを桁行方向に一列に並べると、一列につき前者は約56枚、後者は約37枚必要となる。仮に葺き足を1尺とすると身舎の前流れに三列、後流れに六列、庇に五列が必要となる。栢板は五千余枚とあるので、一列に七枚から八枚重ねて葺くものと算定される。葺板を重ねて葺くのであるから、この屋根は長柿葺の一種である段柿葺^{注44)}と言えよう。また、この葺板を留めるための母屋桁が野屋根内にあったものと想定される。

なお、以上のように重ねた栢板や檐板をずらしながら葺くことにより、小札を重ねた鎧のように見えたことから、鎧葺と称された可能性はある。

【床】

「用材注文」にある「大床下梁四支〔五六寸、長一丈三尺〕」は、

大床の下にある梁すなわち大引と考えられる。中世において大床は廻縁を示すことが少なくないが、「用材注文」の中では、廻縁は「縁」（「縁角木」とあることによる）と記されている。したがって、当文書において大床は廻縁を示すものではないとしてよい。また、1丈1尺の身舎梁間に対して1丈3尺の「大床下梁」は、身舎下の大引の用材として適当な長さである。

断面は、「五六寸」に仕上げ削りを施し、幅4寸5分・成5寸5分とされる。なお、「用材注文」に根太に相当する用材は計上されていないが、床板を張るために必要となるため復元図に補加した。

床板については、「用材注文」に「板敷板」等の記述は見られない。但し、後半の欠落部分に、「 百六十枚〔但後継定〕」、「 六十四枚〔長六尺五寸〕」、「 枚〔長一丈二尺、広一尺〕」という板材が計上されており、これらのうちいずれかが、床板を示すものである可能性がある。

【組物】

組物の用材として「用材注文」に「斗二」と「臂木十六」が挙げられている。このうち二つの斗は、両妻において身舎梁の中央下を受ける大斗とするほかはない。そして、肘木（「臂木」）は、組み合わせる斗がないので舟肘木であることが分かる。

まず、舟肘木が必要となるのは、棟通りを除く^{註45)} 身舎柱上と庇柱上の十二箇所である。それぞれ一丈ずつ用いて十二支を使う。次に、冢叔首上に棟木を受ける舟肘木が必要であり、四組の冢叔首上に一丈ずつ配して四支を使う。合わせて十六支となり、計上された員数に合致する^{註46)}。

【建具・壁】

建具

まず、「宝殿指図」に「正面三間詣子」とあることから、正面三間は格子すなわち蓐としていたことが分かる。また、平面指図において、庇の向かって左側面の柱間に「妻戸」とあり、板扉が設けられていたことが知れる。但し、いずれも「用材注文」に見られない。

また、平面指図における内外陣境の柱筋には「間草三間小大犬丸皆塗」と記されている。詳しくは次項で述べるが、「小大犬丸皆塗」は小大犬丸（名）が板壁に漆喰を塗る負担をすることを意味することから、この三間の間草上（小壁のこと）が板壁であったことは分かる。建具に関しては、「宝殿指図」に「詣子」や「妻戸」の記載があることから、記載のない柱間には建具はなかったとしてよいであろう。したがって、内外陣境の各柱間は、内法長押下は間草を渡すのみで開放されていたと考えられる。なお、内々陣正面の柱筋においても同様に建具はなかった可能性が高い。

壁

「宝殿指図」に描かれた平面指図の側回りにおいて、建具（蓐及び妻戸）以外の柱間には「小法師丸」や「三郎丸」といった「名」^{註47)}（造営負担者）が記載されている。平面指図の脇に「如此名ノ一間宛塗蠣灰名別二斗宛入」とあることから、名の記された箇所は板壁を蠣灰塗としていたことが分かる。

また、妻戸の柱間には「妻戸上小大犬丸」、内外陣境には「間草三間小大犬丸皆塗」とあり、妻戸上及び内外陣境の間草上において、先の板壁と同様に蠣灰塗を施す小壁があったとしてよい。加えて、長押の項において述べたように、内々陣正面には「板敷下三間一在皆塗」とあることから、腰長押（框）下にも同様の板壁が嵌っていた

ものと考えられる。

【廻縁・木階】

廻縁

廻縁の用材として「用材注文」に「縁柱十本〔長三尺、口六寸〕」と「縁角木二支〔長七尺、五六寸〕」が挙げられている。平面の項にて述べたように、「宝殿指図」の平面指図により、庇回りにのみ縁があったことは明らかである。その平面指図の廻縁には、庇の側柱筋に対応する位置と正面両隅の計十箇所^{註48)}に黒点が描かれており、それが「縁柱」すなわち縁束を示すものと考えられる。したがって、用材として計上された縁束十本と縁角木二支は、必要な員数に合致する。

縁束は「口六寸」とあることから円柱であることが分かり、仕上げ削りを施し直径5寸5分とされる。縁束の長さすなわち縁の高さについては、次項にて詳述する木階との関係で、木階四級分（一級の成が4寸5分）の1尺8寸と算定される。また、縁の出については、縁角木の用材が「長七尺」であることから、側柱真から4尺^{註48)}の出とするのが適当であろう。

なお、縁板の用材は「用材注文」に見えない。後半の欠落箇所に挙げられている可能性も否定できないが、詳細は不明である。復元図においては、類例の多い切目縁とした。加えて、高欄の用材も「用材注文」にないが、「瀬高下庄鎮守大菩薩宝殿修理用途日記」に、「御宝殿修理用途」として「八九寸七反〔代二貫文、カウラシノレウ、二支、カヤイノレウ〕」と挙げられていることから、承久度本殿の廻縁には高欄があったと考えられる。

木階

「用材注文」の「尅橋木四支〔長九尺、同下桁〕」は、キザハンキすなわち木階のための材木としてよい^{註49)}。「宝殿指図」の平面指図に木階は描かれていないが、通例に従い正面中央に配していたものと考えられる。長さに続けて「同下桁」とあるが、同文書に倣うべき「下桁」は見られない。そこで本稿においては、「大床下梁」の「五六寸」を採用し、幅5寸5分・成4寸5分の木階四級を復元図に付した。

（2）承久度本殿の構造形式

以上の考察結果に基づき、復元された承久度本殿の形式を改めて述べておきたい（図2～7）。

桁行三間（柱間6尺2寸）・梁間二間（柱間5尺5寸）を身舎とし、その正面に一間（柱間5尺5寸）通りの庇を付けた三間社流造、段柿葺とする。庇回りにのみ縁を廻らせ刳高欄を設け、正面中央には四級の木階を置く。

身舎を内陣、庇を外陣とする。身舎の棟通りの柱筋より奥は内々陣とする。内陣の両側面及び背面は蠣灰塗の板壁を嵌める。外陣正面は蓐を吊り、向かって左側面は妻戸を建て、右側面は蠣灰塗の板壁とする。

亀腹上に礎石建とし、総柱とする。梁間方向の柱間に渡した大引上に根太を配し、床板を張る。縁長押・腰長押と内法長押で柱を固める。内外陣境において内陣側の床板を長押一本分高め、さらに内々陣は内陣よりも床を高くし神座とする。

身舎柱には梁を架け、冢叔首を載せる。冢叔首上には舟肘木を配し、化粧棟木を受ける。組物は身舎・庇ともに舟肘木とし、身舎の妻面中央柱上のみ大斗とする。身舎・庇ともに一軒疎垂木とし、化

粧垂木上には茅負及び木舞を載せ、垂木裏板を張る。野屋根は、段柿葺のための母屋桁が載る程度でほとんどない。屋根の頂部には開板を置く。

6. 承久度本殿の特色とその背景

(1) 承久度本殿の建築的特色

復元された承久度本殿における特徴的な形式として、庇回りにのみ縁を廻らせること、床高が低いこと、段柿葺の屋根とすること、身舎・庇ともに大疎垂木の一軒とすることが挙げられる。

まず、廻縁についてであるが、流造本殿は身舎も含めた四面もしくは三面^{注50)}に廻縁を廻らせることが多いが、承久度本殿においては庇回りのみにしか設けていない。庇の向かって左側面の柱間のみ開かれた妻戸は、明らかに出入りのためのものであることから、実用する箇所に限って縁を廻らせたものと考えられる。すなわち、庇回りのみの縁は、通常の廻縁を省略した形式と言えるであろう。また、全体的に床高が低いことについても、本殿として必要最低限の形式を採ったものと考えられ、それを解消するために内部において内々陣の床高を内陣より高めた可能性がある。

次に、屋根葺についてである。前述のように、建暦二年に修理のための檜皮が注文されており、建暦三年焼失以前は檜皮葺であった^{注51)}ことが明らかである。したがって、承久度において檜皮葺から段柿葺へと格式を下げて再建されたことが分かる。

そして、最も注目されるのが垂木割である。一般的に三間社流造本殿は、その原型とされる上下賀茂神社の本殿のように、身舎の垂木は繁垂木とし、庇の垂木は大疎垂木とするか、その発展形式である身舎・庇ともに繁垂木とするかのいずれかである。しかし、承久度本殿はそのいずれでもなく、身舎・庇ともに大疎垂木という異例の形式をとる。先に挙げた廻縁の形式や屋根葺等を勘案すると、通常の垂木割を省略したものとするのが穏当であろう。

なお、永井氏はこの垂木割について「流造の古い形式を示すものかも知れない」とし、また、繁垂木と疎垂木の区別が空間の意味に対応する性格を持つならば、「身舎と庇において構造的な区分はあるものの、空間の性格は等質であり、ともに神の場となっていたと考えられるのである」としている。さらに、「立面構成の低平さは、神社建築としての古様性に基くのかも知れないが、もともと前室としての庇への人の入室を前提としなかったことによるとも考えられる」と述べている。しかし、屋根葺の変更等から明らかのように、承久度本殿は前身本殿をそのまま再現したものではないことから古式を伝えているとは言い難い。また、庇の妻戸と廻縁の配置から、少なくとも外陣である庇には神官が入るように設計されていたと考えた方がよいであろう。

(2) 仮屋の可能性

承久度本殿が省略された形式及び格式を下げた形式を呈することになった背景について考察したい。そこで、承久元年遷宮後の様子を示した仁治三年の「高良別宮神官等申状」を改めて引用すると、昔宝殿及大破、礎石徒変苔下、悲哉、今仮屋忽令朽損薨不全、爰適去天福年中、僅構板庇白地奉移許也、其後就代ノ預所、雖令言上子細、連口得替之故、于今未達前途、自然送年重月之間、仮屋已口落雨露更不止、御正体又及露頭哉、顛倒在近者歟、とある。この「昔宝殿及大破」とは建暦三年の社殿焼失を示してい

ると考えられ、「今仮屋忽令朽損薨不全」とあることから、今(仁治三年当時)は仮屋が朽損し、薨^{注52)}(屋根)は不全であると解釈される。したがって、承久度に「御宝殿」として再建されたのは、この仮屋であったと考えられる。

他社の例を見ても、中世において経済的に困難となり古来より伝わる社殿の形式を維持できなくなった神社が少なくないが、中でも当社の事例に近いものとして、本殿を仮殿で代用した出雲大社と香取神宮が挙げられる。

出雲大社の場合、宝治二年(1248)に遷宮された正殿が文永八年(1271)に焼失した。その再建に際しては、まず仮殿を造営しようとしたが未完の状態が長く続き、元亨三年(1323)もしくは正中二年(1325)によりやく仮殿が完成し遷宮が行われ、その後も仮殿が恒常的に正殿の代用となったと考えられている⁸⁾。また、香取神宮の場合、元徳二年(1330)に遷宮された正神殿が永享五年(1433)までに失われ、その後は仮殿であるアサメ殿が正神殿の代用とされたという。

以上の二例は、いずれも本殿の造営が困難となった際に将来本殿を改めて造営することを前提として、さしあたり仮殿を建てて本殿の代用としたものと言える。その仮殿が本殿より略式であった^{注53)}ことは言うまでもない。当社においては、再建の際に「御宝殿」の用材を注文し遷宮を行ったと明記されていることから、往時は本殿として認知されていたとしてよい。但し、部分的に形式を省略し、格式を下げて再建を遂げた結果、後世に仮屋と呼ばれる形式となってしまったと推測される。

(3) 高良大社の影響

また、総柱とすること、庇の垂木を身舎・庇境の桁に掛けることについても承久度本殿の特徴的な形式として挙げられる。これらの形式は、先述したような省略された形式あるいは格式を下げた形式とは言えず、別の要因によるものと考えられる。

まず、総柱とすることについては、当社の本社に相当する高良大社本殿^{注54)}の古式と一致する形式である。中世における高良大社本殿については佐藤正彦氏⁹⁾、三浦正幸氏¹⁰⁾、米澤貴紀氏等¹¹⁾の諸説があるが、いずれにおいても総柱の本殿が復元されている^{注55)}。また、三浦氏は『高良玉垂宮神秘書』^{注56)}に記された内々陣(「内殿」)の壁や扉に描かれた絵の配置についても検証し、内々陣の中央三間は相互の間に仕切りがなく一室としていたことを明らかにしており^{注57)}、この点についても承久度本殿と共通する^{注58)}。

次に、庇の垂木についてである。元来、流造本殿の庇は二系統あり、上下賀茂神社の本殿のように角柱とし建具等を設けない庇と、伏見稲荷神社本殿のように円柱とし建具等で囲われた庇である。前者の場合、庇の垂木は身舎正面軒の茅負(もしくは木負)から打越垂木として掛けるのに対し、後者の場合、身舎・庇境の桁上に掛ける。承久度本殿はその後者に相当するものであり、中世の高良大社本殿の庇についても同様である。

加えて、承久度本殿の庇において、正面に葎、側面に妻戸を建てることは、宗像大社辺津宮本殿や筥崎宮本殿等の社格の高い大きな本殿に見られる形式であり、中世の高良大社本殿もこの形式を採っていたと考えられている^{注59)}。

したがって、承久度本殿は中世の高良大社本殿と共通する特徴が少なくなく、当社本殿がその影響を受けて成立した可能性が十分にあると言えるであろう。

7. 結語

復元考察の結果、先学による復元案とはやや異なるものとなった。承久度本殿に見られる特徴のうち、庇回りにのみ縁を廻らせること、床高が低いこと、段柿葺の屋根とすること、身舎・庇ともに大疎垂木とすることは、通常の本殿を省略した形式あるいは格式を下げた形式と言える。これは、経済的事由により焼失前の前身本殿の形式を維持できなくなったための、やむをえない措置と考えられる。また、総柱とすること、庇の垂木を身舎・庇境の桁に掛けること等、中世高良大社本殿と共通する特徴が少なからず見られ、その影響を受けて成立したものとしてよい。

承久度本殿は、用材注文に加えて宝殿指図も伝えられているため、

より確からしい復元が可能であった。したがって、類例の乏しい鎌倉時代前期の流造本殿の一形式を示す貴重な例と言える。また、高良大社の影響下で成立し、上下賀茂神社とは別系統の流造本殿であることから、流造本殿の発展過程を考察する上でも重要な位置を占めるものと言えよう。その一方で、一般的には中世後期に多く見られる本殿の縮小が、当社においては承久元年という比較的早い時期に行われたことも注目に値する。

なお、本稿は科学研究費補助金(特別研究員奨励費)「古文書による社寺建築等の復元と中世の建築工事に関する研究」の成果の一部である。

図2 復元平面図

図3 復元側面立面図

図4 復元正面立面図

図5 復元側面立面図

図6 復元桁行断面図

図7 復元梁間断面図

0 10 50寸

参考文献

1) 佐藤正彦：鷹尾神社本殿について―承久元年再建時の指図より―，日本建築学会大会学術講演梗概集，pp. 1847～1848，1977. 10
2) 永井規男：鷹尾神社承久再建本殿の建築構成について，技苑，第48号，pp. 46～50，1986. 8
3) 谷重雄：上賀茂神社嘉元造替の本殿，建築史，二ノ四，pp. 295～316，1940. 7
4) 熊本中世史研究会編：筑後鷹尾文書，青潮社，1974
5) 柳川古文書館編：筑後鷹尾文書，福岡県地方史研究連絡協議会，1995
6) 福山敏男：香取神宮の本殿，日本建築史研究，墨水書房，1968
7) 三浦正幸：香取神宮本殿，日本建築学会計画系論文報告集，第362号，pp. 142～149，1986. 4
8) 三浦正幸：出雲大社本殿．太田博太郎編：日本建築史基礎資料集成一(社殿Ⅰ)，中央公論美術出版，1998
9) 佐藤正彦：中世期に於ける高良神社本殿について，日本建築学会大会学術講演梗概集，pp. 2645～2646，1983. 9
10) 三浦正幸：高良大社本殿，四面底系平面の神社本殿の研究，私家版(東京大学博士論文)，1986
11) 米澤貴紀・永井規男・中川武・溝口明則・河津優司・坂本忠規・佐々木昌孝・小岩正樹・伏見唯：『木砵之注文』を通してみた室町中期高良大社本殿平面形式の復原，2009年度日本建築学会関東支部研究報告集，pp. 509～512，2010. 3

注

注1) 活字本『筑後鷹尾文書』(参考文献4)による。
注2) 鷹尾家文書(遷宮祭礼関係文書写の部)一。この文書は、保元四年(1159)と承安三年(1173)の記のある二通よりなる。以下、すべての文書番号は、活字本『筑後鷹尾文書』(参考文献4)による。
注3) 鷹尾家文書(遷宮祭礼関係文書写の部)四。この文書は、正治元年(1199)から建暦三年(1213)までの七通よりなる。
注4) 鷹尾家文書(遷宮祭礼関係文書写の部)七。この文書には別文書が錯簡して入り、それが書写され連続した一文書となっている。引用部分はその錯簡部分に相当する。
注5) 建暦二年(1212)「遷宮諸役次第并別宮仏前御供支配注文」(鷹尾家文書〈遷宮祭礼関係文書写の部〉六)に「建暦二年〔歳次壬申〕宮移十一月 日」とあることによる。
注6) 鷹尾家文書(遷宮祭礼関係文書写の部)一〇。なお、同文書に「但御正体ハ惣檢校華王房取出参幡御鉾同」とあることにより、御正体(神体)は内陣装束の幡や鉾とともに取り出して無事であったことが分かる。
注7) 「瀬高下庄領家下文」(鷹尾神社文書二)においても社殿焼失の記述が見られる。
注8) 「御宝殿造管用材注文」(鷹尾家文書〈遷宮祭礼関係文書写の部〉一二)による。
注9) 「鷹尾社遷宮宝殿指図并用途直法等注文」(鷹尾家文書〈遷宮祭礼関係文書写の部〉一四)による。
注10) 鷹尾家文書(一紙文書の部)一三
注11) 「高良別宮大官司紀元保申状」(鷹尾家文書〈一紙文書の部〉一六)に「当社守護御宝殿造営事、去仁治三年□□□一名〔限二ヶ年所当〕可造畢之由、被仰下之处、以件名二ヶ年分□□十余石難造畢之上、即名頭百姓等未済雖有其□□□廻随分秘計、加履最御造営雖修其功」とあることによる。また、「鷹尾社神官等言上状案(前欠)」(鷹尾家文書〈一紙文書の部〉一七)からも知られる。
注12) 鷹尾家文書(一紙文書の部)一七
注13) 「鷹尾社宝殿上葺用途日記」(鷹尾家文書〈一紙文書の部〉一八)による。
注14) 「鷹尾社遷宮用途例言上状案」(鷹尾家文書〈一紙文書の部〉一九)による。
注15) 「瀬高下庄鎮守大菩薩宝殿修理用途日記」(近世写本鷹尾文書四)による。
注16) 「高良別宮遷宮用途進状案」(鷹尾家文書〈一紙文書の部〉二八)による。
注17) 鷹尾家文書(一紙文書の部)七六

注18) 「鷹尾社造営願案(後欠)」(注17参照)に「立斎様御代神殿破壊に付而奉願候処二、□神殿不及申、楼門無残所御建立被遊候」とあることによる。
注19) 「鷹尾社造営願案(後欠)」(注17参照)による。
注20) 『柳川の社寺建築Ⅱ』(柳川市史編集委員会編，柳川市，2011)を参照されたい。
注21) 注8参照。
注22) 注9参照。
注23) 佐藤は、現存する神社本殿(国指定重要文化財)のうち瓦葺とする四棟(日部神社本殿・鶴林寺行者堂・厳島神社末社豊国神社本殿・大神神社摂社大直禰子神社社殿)を挙げ、承久度本殿が瓦葺であった傍証としている。しかし、それを類例とするには以下のような難点がある。
まず、日部神社本殿は、桁行三間・梁間三間(背面は二間)の正面に三間の向拝を付す。細部意匠等により、本体は十六世紀後期から十七世紀頃、向拝は十四世紀後期頃の建築と考えられ、もとは本体と向拝が別の建物であったものと推察される。本体は神社本殿というよりはむしろ仏堂の平面に近く、屋根も入母屋造妻入であることを勘案すると、神社の本地堂(もしくは薬師堂)等の仏教建築であった可能性が指摘できる。すなわち、日部神社本殿は純粋な神社本殿であったとは認められない。また、鶴林寺行者堂は、寺院内の鎮守堂である。そして、厳島神社末社豊国神社本殿は、もとは大経堂として建てられ、神仏分離により神社本殿とされたものであり、大神神社摂社大直禰子神社社殿も、もとは大御輪寺本堂として建てられ、明治初年に若宮社の社殿に転用されたものである。以上のように、佐藤が挙げた四棟の神社本殿は、いずれも承久度本殿が瓦葺であったことの傍証にはならない。
注24) 活字本(参考文献4)では「尺」とされている。
注25) 活字本(参考文献4)では「□」とされている。
注26) 活字本(参考文献4)では「□」とされている。
注27) 活字本(参考文献4)では「十」とされている。
注28) 前述のように、活字本(参考文献4)では「瓦」とされている。
注29) 身舎柱については「柱長」とあるのに対して、庇については「高七尺五寸」とあえて「高」と記されていることにより、庇柱の長さではなく、庇の高さを示していると考えられる。
注30) 寝殿造の広庇(「年中行事絵巻」の法住寺殿や東三条殿を描いた場面等に散見される)であれば、外側の柱は面取角柱で柱間は吹放ちとし、床は身舎よりも長押一本分低くするのが通例である。
注31) 興福寺北円堂は、承元四年(1210)に建立されたものである。『重要文化財興福寺大湯屋・国宝同北円堂修理工事報告書』(奈良県文化財保存事務所，1965)によれば、材木の表面仕上げとして手斧及び槍鉋で5mmから8mm削られているという。
注32) 身舎・庇境は、身舎側に長押を廻らせるので、庇としては三面に長押を廻らせることとなる。
注33) ここにいう「一在」は、造営料を負担した「名」である。「名」に関しては、すでに佐藤の論考(参考文献1)により明らかである。
注34) 太さについての記述はないが、同時代の現存遺構(西明寺本堂や法隆寺東院礼堂等)を参考として、柱に対する比率により、長押の成は4寸とし、ほぼ台形断面を呈していたと想定される。
注35) 身舎柱・庇柱上は、いずれも舟肘木(寸法の記述がないので成は推定となる)と桁(成4寸5分)を載せるという同様の形式と考えられるので、それらを含めなくても垂木勾配に影響はない。
注36) アサメの漢字は「女」偏に「盛」。
注37) 垂木の太さについての記述はないが、同時代の現存遺構(注34参照)を参考として、柱に対する比率により、垂木の成を2寸8分、幅を2寸と算定される。
注38) 当麻寺本堂の閻伽棚は疎垂木木舞裏であり、その木舞間隔は約2尺2寸である。
注39) 近世写本鷹尾文書四
注40) カヤイは茅居と書き、茅負を指す語である。
注41) 拙稿「仁治度厳島神社楽屋の復元的研究」(建築史学，第51号，pp. 68～93，2008. 9)及び拙稿「仁治度厳島神社朝屋座の復元考察」(芸備地方史研究，第275・276号，pp. 1～22，2011. 4)を参照されたい。
注42) 『広島県史古代中世資料編Ⅲ』(広島県，1978)に所収。
注43) その他の檜皮葺の社殿に開板の用材は見られない。

注44)同様に細長い柿板を用いて屋根を葺く例としては、常磐神社玉殿第一殿（広島県安芸高田市八千代町所在、天文年間〈1532～1555〉建立）が挙げられる。常磐神社に使われた柿板は、長さ1尺及び1尺7寸、幅2寸8分から5寸4分、厚1分8厘であり、葺き足は9寸という。詳しくは、山田岳晴・三浦正幸「安芸国の中世神社玉殿における屋根構造の調査研究」（日本建築学会計画系論文集，第572号，pp. 139～145，2003. 10）を参照されたい。

注45)身舎柱のうち、棟通りにおいては舟肘木を配す必要がない。妻壁においては大斗を配し、内部の柱（内々陣・内陣境の柱）は身舎梁下となるため、舟肘木は不必要である。

注46)大斗及び舟肘木は員数のみの記載であるので、寸法については同時代の現存遺構（神谷神社本殿、金剛峯寺不動堂、高山寺石水院等）を参考とし、復元図に付した。

注47)注34参照。

注48)「用材注文」に計上された用材と仕上がり寸法を比較すると、1尺（継手・仕口は含めず）以上は余分に見積もってあることが分かる。縁角木についても同様とすると、側柱から縁隅木端部の長さは6尺以下に収まるものと想定され、そのためには縁の出が側柱真から4尺とするのが適当である。

注49)佐藤は、この記述により「正面中央間の縁の前に長さ9尺の階段五段が設けられていたらしい」とする。しかし、用材が9尺なのであって、実際はそれより少し幅の狭いものとなる。また、段数は四段の誤りであろう。

注50)特に三間社流造本殿の現存遺構において、身舎も含めた三面に廻縁を設けることが圧倒的に多い。承久度本殿と同様に庇回りのみの廻縁とする三間社以上の中世の流造本殿は、永井氏の指摘にもある龍山八幡神社本殿（広島県）と雄山神社前立社壇本殿（富山県）のみである。

注51)「鷹尾社祭礼神官装束等覚并御財物日記」（注4参照）の記述による。

注52)葺は瓦のみならず屋根を示すこともある。ほぼ同時代の建暦二年（1212）頃の成立とされている『方丈記』に、「玉敷の都のうちに、棟を並べ葺を争

へる、高き賤しき人の住ひは、世々を経て尽きせぬものなれど、これをまことかと尋ねれば、昔ありし家は稀なり」という一節があるが、ここにいう葺は、住居の屋根を意味している。往時の住居の屋根は草葺や板葺や檜皮葺等であることから、葺は瓦葺の意ではなく、広く屋根の意に用いられていることが分かる。

注53)出雲大社は正式な仮殿ではなく摂社（阿式社）の寸法をとるものとし（参考文献8）、香取神宮は正神殿五間に対して仮殿三間であった（参考文献6・7）ことから、本殿よりも仮殿が略式であったことは明らかである。

注54)現在の高良大社本殿は、寛文元年（1661）の再建になるもので、桁行三間・梁間一間の内陣の前面に二間通りの外陣を備えた桁行三間・梁間三間の平面とする。したがって、それ以前の形式を保っていない。

注55)中世の高良大社本殿に関しては、佐藤、三浦、米澤等により、それぞれ復元が行われている。佐藤と三浦はともに、『高良玉垂宮神秘書』の記述により、桁行五間・梁間五間で総柱に復元している。米澤等は、『木碁之注文』の記述により、桁行五間・梁間四間で総柱に復元している。なお、本殿の年代については、佐藤は中世、三浦は天文十四年、米澤等は室町時代中期としている。

注56)『高良玉垂宮神秘書同紙背』（高良大社，1972）に所収。

注57)内殿の絵について考察したのは三浦のみである。また、米澤等によれば、『木碁之注文』には内殿の仕切壁について記述はないという。

注58)年紀未詳であるが「障子張替注文」（鷹尾家文書〈遷宮祭礼関係文書書写の部〉二〇）に「御障子キ帳ノカヘシロノ帳」とあることから、当社本殿の内々陣には、衝立の障子が立てられていた可能性がある。

注59)三浦の復元案による。

（2012年4月10日原稿受理，2012年6月4日採用決定）